

## ヴァンデー反乱の経済的原因

小 林 良 彰

- I はじめに
- II 貴族・僧侶の役割
- III 封建制廃止の反動
- IV 農民の役割
- V 王党派反乱の経過
- VI 王党派反乱の意味するもの

### I は じ め に

フランス革命の最中に西部のヴァンデー県 Vendée におこった王党派の反乱と、その周辺のブルターニュ・メヌ、ノルマンディー、ツレーヌの地方にひきおこされたフクロウ党（シュアン）Chouan の反乱は、革命政府にたいして重大な脅威を与え、お互に虐殺をくりかえす死闘を演じさせた。「捕虜を取るな」という合言葉に示されるとおり、革命政府と王党派の間の憎しみは徹底的なものであった。ところで、この対立関係が、革命政府の側のブルジョアジーと、王党派の側の貴族、僧侶という形に単純化されるならば、あるいは、革命政府の支持者に農民があり、王党派の支持者はブルジョアジー、農民、都市人民を除いた勢力であるといえるならば、王党派の反乱についての解釈はきわめて単純なものとなり、あえて詳しい分析を必要としない。

問題は、王党派反乱の最大の人的資源が農民であったということである。そのことは、単に農民の意識が低いとか、生まれつき保守的であり迷信深いというようなことでは説明がつかない。革命の初期、ヴァンデーの農民も反領主的蜂起をおこし、むしろ革命を歓迎したのである。だが、それから4年たつと、彼らは反革命に転じた。その間の4年間は、貴族、僧侶がいかに農民を煽動しても、大勢をうごかすことができなかった。それが、1793年3月10日、30万人の徴兵制が布告されるとともに、大規模な反乱に発展したのである。この原因を単に徴兵制にたいする不満にもとめるのは、見当ちがいである。農民が大群をなして反革命運動に飛びこんだ原因は、もっと深い経済的なものに根ざしている。フランス革命が農民に対して利益を与えなかったということが、農民に幻滅をあたえ、反革命運動に参加させたのである。しかもその不満の根源を探るならば、極左派として知られる過激派の不満と、王党派の不満がよく似ていることに驚かされる。1795年ヴァンデーでだされたシャレット侯 Charette の布告はつぎのように国民公会を攻撃していた。

「投機業者、買占人、大食家、サギ師、公共の富を喰いつくす連中について」「国民公会がすべての悪の根源であり、たとえ国民公会が最高価格制を廃止したとしても、それは彼らが最高価格制で買入れを終り、つぎに高く売りつけるためにやめた<sup>1</sup>だけである」。

ようするに、ブルジョアジーを攻撃する態度では、極左と極右が同じであり、しかも両派とも同じ人的資源の上に立っている。それだけに、国民公会の側が過激派を王党派の手先といったが、それが事実無根であるとしても、そう思う必然性はある。こうして、ヴァンデー反乱の存在は、過激派の存在と同じくフランス革命が農民を満足させなかったこと、すなわち

1 E. Tarle, *Germinal et Prairial*, Moscou, 1959, traduit par Jean Champenois, p. 23.

農民革命を実現しなかったということの証拠になる。その場合、反乱に参加した農民はどのような農民で、国民公会の側に立った農民はどのような農民かということが大問題になる。そうした問題を解明することにより、フランス革命のブルジョア的限界を認めることができるだろう。

## II 貴族・僧侶の役割

当時の報告によると、「反乱軍は、貧乏で亡命できない田舎貴族に指揮されている。ときに何人かの富んだ貴族がいるが、これは少ない<sup>2</sup>」と言われている。事実、高級貴族の役割は比較的少なく農民と日頃から接触のあった地方貴族が反乱の指導権をにぎっていた。

ヴァンデー反乱に参加した高級貴族の中では、タルモン大公 Talmon (トレモワイユ公 Trémouille) が有名である。93年1月亡命から帰って潜伏し、28才でヴァンデー軍に参加した。アンジェで逮捕されたが脱獄し、ナント攻撃に参加し、各地方に散在する反乱の指揮者の連絡をとり、大公として総指揮権を確立しようと努力した。軍事的知識も功績もなく、あまり評価されていなかったが、家柄が高いために名目的な指令官となり、実際の戦闘ではシャレット侯のもとで行動していた<sup>3</sup>。

レザルディエール男爵 Lézardière やデルベ d'Elbée のようなヴァンデーの貴族は、フランス革命の初期には多かれ少なかれ革命に好意的な態度を示していた。しかしすぐに反革命に転じ、レザルディエール男爵は王弟アルトワ伯やコンデ大公と連絡をとり、その名のもとに軍事的反乱を計画した。陰謀の中心はポワルー（サーブル・ドロヌの近く）にある彼の

2 P. Caron, *Rapports des agents du ministre de l'intérieur dans les départements, 1793-AnII*, t. 2, Paris, 1951, p. 350.

3 L. Dubreuil, *Histoire des insurrections de l'Ouest*, t. 1, Paris, 1929, p. 263.

城であり、ここに貴族が武装して集合し、王の逃亡を合図にリヨンへの道を占領し、3万人でかためる計画であった。しかし、王がヴァレヌで逮捕されたため、計画は実行されなかった。その翌日軍隊が派遣され、貴族と貴婦人は城から逃亡し、彼の城は炎上させられた。レザルディエール男爵と36人の貴族、僧侶が逮捕されたが、1791年9月13日ルイ16世が憲法を受諾したとき、国民議会の特赦があり釈放された。この段階では、貴族の反革命陰謀はまだ大衆的基礎をもっていなかった。

ブルターニュ州で組織されルーリー侯 Rouerie の陰謀は、はじめ王権に抵抗し、ついで革命に抵抗する地方貴族の動向を象徴的に示している。高級貴族は、不在、不道德、要求過剰のため影響をもつことができず、とくにブルターニュではその傾向が強かったため、地方貴族は高級貴族を無視して運動をおこした。ルーリー侯はラ・ルーリー村に城と領地をもつ若い貴族で、波乱に満ちた生活を送った。決闘、借財、投獄、結婚、自殺の試みののち、アメリカの独立戦争に参加し、ここで「アルマン大佐」の名で英雄となり、新思想の持主としてアメリカ人を連れて帰国した。しかし、帰国するとラファイエット以上に不幸で、なんらの官職がなく、不満の中に生活をしていた。1788年、ブリエンヌによる司法改革で高等法院判事の数削減されたとき、憤慨して12人のブルターニュ貴族の1人としてパリに抗議に出かけ、バスチーユに投獄された。ブリエンヌの没落で釈放され、故郷では大歓迎された。

革命が始まると、すぐに反革命の陰謀をはじめた。しかし、彼の陰謀は、ブルターニュ州の独立政権を貴族の指導権によりうちたてようとするものであったので、貴族の多くは同調せず、むしろ亡命をえらんだ。

91年7月、不平がひろがり、反抗僧の影響がつよまると同時に積極的に活動し、一度国外に出て王弟アルトワ伯、プロヴァンス伯に会って権限を

4 *Ibid.*, t. 1, p. 122. G. Walter, *La guerre de Vendée*, Paris, 1953, pp. 29—32.

与えられた。首謀者の大半は地方貴族、軍隊の中級将校であり、それに法律家、医者、下僕、農民が少数だけ参加していた。資金は各人の年収からの支出にたより、あまり集まりはよくなかったが、92年には「このブルターニュ協会」が6,600の小銃、4つの大砲、火薬、鉛をたくわえた。しかし陰謀が発覚し、ルーリー侯は潜伏、逃亡をつづけ、森の中の隠れ家で重病にかかって死んだ。<sup>5</sup>

デルベはアンジュに小領地をもち、館に住む地方貴族である。騎兵連隊の中尉までになったがそれ以上に昇進せず、退役した。しかし彼の選挙の資格は「ブルジョア」となっている。はじめ革命に共鳴し、町の検事となり、この資格で教会財産の買受に応募したが落札はできなかった。91年に亡命し、92年2月には帰国して土地の没収をまぬがれた。そのまま目だたない生活を送っていたが、93年3月、蜂起した農民が彼の館に来て首領になってくれとたのんだ。デルベは戦争の不利を説いてやめさせようとしたが、農民の決意にうごかされて運命をともにすることになり。指揮を引き受けた。<sup>6</sup>

シャレット侯はラガルナシュ村に館と領地をもつ地方貴族で、伯父に高等法院判事をもっていた。92年のはじめ亡命してのち帰国し、8月10日の事件でチュイルリー宮殿を守り、このあと故郷に帰って事件から遠ざかろうとつとめていた。しかし農民の懇請により指揮を引き受け、93年3月27日、8,000人の農民をひきいてポルニック市を包囲し、陥落炎上させた。

ボンシャン侯 Bonchamp はヴァンデーに二つの城をもち、革命のとき連隊長になっていた。アメリカ独立戦争に参加したが、1791年には王党派となり、チュイルリー宮殿の防衛では勇敢さを発揮した。そのあと故郷に

5 L. Dubreuil, *op. cit.*, t. 1, pp. 98—114.

H. Wallon, *La révolution du 31Mai et le fédéralisme en 1793 ou la France vaincue par la commune de Paris*, t. 1, Paris, 1886, p. 170.

6 L. Dubreuil, *op. cit.*, t. 1, p. 154.

G. Walter, *op. cit.*, p. 68.

帰って潜伏し、周囲の農民が反乱をおこすと同時にその指導者となり、反乱の英雄となり、のち重傷を負った。レスキュール侯 Lescure はレザルディエール男爵の陰謀に参加し、一度亡命してから帰国し、8月10日ではルイ16世を防衛し、そのあと故郷に帰って潜伏し、ついで反乱の指揮者になった。ラ・ロシュジャックラン侯 La Rochejacquelin は、ボワツ州における王の代理官、陸軍少将であり、これは高級貴族であった。亡命して王族軍に参加したが、その息子がチュイルリー宮殿の防衛に活躍し、つづいてレスキュール侯の城に避難した。息子はのちにヴァンデー反乱を指導し、伝説的な勇名を残した。ロシュジャックランの城と土地はラデュルベリエールにある。<sup>7</sup>

僧侶の多くは革命のはじめに賛成し、僧侶財産の没収と僧侶基本法の制定のころから次第に反革命に転じた。ナント司教ラ・ローランシーは、基本法を拒否するように命令した回状をロワール・アンフェリウール県に流し、その結果、91年1月23日の宣誓のときにほとんどすべての司祭と助任司祭が基本法を拒否し、マシュクール郡では、24人の司祭のうち、2人だけが宣誓した。サントーバン・ド・ボービニエでは、郡の役所に80人ばかりが宣誓の日におしかけて、教会財産の没収は貧民救済を不可能にすると抗議した。ヴァンデーの熱心な反抗僧は、リュソンの副司教ボルガールで、彼を中心に僧職を奪われた僧侶は抵抗運動の中樞を結成した。西部の司教のほとんどは国外に亡命し、国外から反革命運動を指導し、威圧的な回状を流しつづけた。これが宗教心のあつい農民にたいして、ある程度の影響をおよぼした。反抗僧の比率はブルターニがなくて81パーセントであり、ロワール・アンフェリウール県では72パーセント、ヴァンデー県は55

7 L. Dubreuil, *op. cit.*, t. 1, pp. 163 et 151.

J. Pinasseau, *L'émigration militaire*, Paris, 1964, t. 2, p. 108.

G. Walter, *op. cit.*, p. 126.

パーセントであった。<sup>8</sup>

### III 封建制廃止の反動

封建的な諸制度に雇用されていた者や、なんらかの形でその制度を利用して生活していた者は、一連の改革によって自分の収入源を失なった。関税の廃止は税関吏の失業をもたらし、塩税の廃止は塩の密輸業者の生活に打撃を与えた。皮肉なことに、塩税の収税人の失業ももたらした。この場合は、取締まる側と取締られる側の双方が失業したのである。狩猟権の廃止は、領主に雇われていた密猟監視人の失業をもたらし、そこで彼らはフランス革命の改革に敵対的となり、没落がはげしいだけに、激烈な反革命の人的資源となった。当時の内務大臣への報告はそのことを指摘している。

「この地域（サーブル・ドロヌ）では服従がみられる。反乱者にしても、政府側にしても、外部の者が来て、農民を反乱にかりたてるか、それとも黙らせた。かり集められた農民と反乱者の区別は簡単につく。反乱者の軍隊は勇敢で間道の地理にくわしいが、これは密猟監視人、塩の密輸業者、塩税の収税人の集まりだからである。……その証拠に、はじめの反乱の集団は海岸地帯、すなわち関税が関門、巡視を増加させ、その結果密輸業者と税関吏が多くいたところで作られた。内陸の有名な反乱の拠点は、ショレ、モルターニュ、シャションでありここは革命前のポワツ州、アンジュ州の境界で、その結果、密輸商人とかつての宿敵塩税収税人の大群がいる。いまやこの二つが手をくんで、<sup>9</sup> 貴族の密猟監視人とともに農民を服従させている」。

8 *Ibid.*, pp. 6-9. L. Dubreuil, *op. cit.*, t. 1, p. 68.

M. Faucheux, *L'insurrection vendéenne de 1793*, Paris, 1964, p. 371.

9 P. Caron, *op. cit.*, t. 2, p. 350.

ブルターニュのフクロウ党の中心は、塩の密輸業者や、貧困におしつぶされたロアン大公領の浮浪者であった。フクロウという言葉は、密輸業者コットロー兄弟 Cottereau のあだ名からきたらしい。この兄弟の一人は、ルーリー侯の副官をしていて、ジャン・シュアンの名で知られていた。密輸業者はもともと<sup>10</sup> 獐猛な反革命者になった。

これらにくわえて、さまざまな階層のものが運動の指導者になった。宿屋のナウ Nau, 同じく宿屋のベソン Besson, 旧密輸商人のグリモー Grimaud, 紡績工のユシュロウー Usureau, 馬車屋のカトリノー Cathelinou などが先頭に立って40人ばかりの群をつくり、人数を呼びあつめて田舎町を攻撃し、やがて5,000人の農民を率いてシュミエ市を占領し、シヨレ市へむかった。このとき別な一隊がストフレ Stofflet に率いられて合同した。ストフレはドイツ人で、モレヴリエ伯 Maulévrier が自分の森の密猟監視人の監督官として雇用した。革命とともに主人は亡命したが、自分は森の中に潜伏し、この時になって農民を率いて出てきたのである。ストフレは軍の指揮官としての能力を発揮し、規律をひきしめ、強力な軍隊に仕立てあげた。これにバルボタン僧正 Barbotin が宗教的権威を代表して協力した。<sup>11</sup>

こうした反乱は、西部フランスのように反乱となって成功した場合だけでなく、多かれ少なかれ各地にひきおこされる可能性があった。人民の階層に属する者が、王党派の影響のもとに反乱をひきおこした実例は、南部フランスのモントーバン市にみられる。93年3月の30万人の徴兵令について、志願兵は18人しか集められず、残りは強制徴兵で補充しなければならぬ段階になって、騒動がひきおこされた。3月10日の午後、馬具製造販売人で旧義勇兵のクラードル Cladel の指揮する一隊の群集が市内に侵入

10 L. Dubreuil, *op. cit.*, t. 1, p. 301.

11 G. Walter, *op. cit.*, pp. 55-67.

し、「自由の樹」を切ると脅迫した。これは飢餓暴動でもあり、王党派の影響下におこされたものでもあった。国民衛兵とジャコバンクラブによって鎮圧されたが、この事件の被告人のうち、1人のブルジョアをのぞいてすべてサンキュロット出身であった。6人の洋服屋、7人の石工、5人のサージ織職人、3人のパン屋、2人の靴屋、1人の大工、以下樽屋、帽子屋、陶器工、指物師、植木屋、下僕が1人ずつであった。クラードルは公安委員のジャンボン・サンタンドレの親戚であったが死刑となり、この死刑は、ギロチンがモントーバンで動いたただ一つの場合であった。<sup>12</sup>

こうして、フランス革命から得るものが無く、かえって物価騰貴、食料不足によって幻滅を感じさせられたサンキュロットの多くが国民公会にたいして反逆した。それがときに王党派の影響下に入り、ときにジャコバン派あるいは過激派の影響下に入ったのであり、出発点としての基本的不満が、革命にたいする幻滅であることについては同一である。

#### IV 農民の役割

王党派の兵士のリストについて、その出身階層の比率を調べると、農民出身者が半数以上で、つぎに多いのが職人、その他中・下層民であり、ブルジョア、僧侶、貴族の数は非常に少ないことがわかる。<sup>13</sup>

この場合、どのような農民かということが重要な問題になってくる。フランス革命の利益にあづかることが少なかったのは、土地の無い農民、すなわち折半小作農、単なる作農、あるいは小農地の所有者としての貧農であった。封建的権利（領主権）の廃止についていえば、理論的にはすべての農民に恩恵を与えたはずであるが、各領地によって負担の重さがちが

12 D. Ligou, *Montauban à la fin de l'Ancien Régime et au début de la Révolution 1787-1794*, Paris, 1958, P. 416.

13 C. Tilly, *The Vendée*, Cambridge Massachusetts, 1964, p. 326.

王党派軍に参加したもののうち、職業が判別したものについての比率 (各郡別)

	サン・フロラン	シヨレ	ヴィイエ	アンジェ	その他
貴族	0.7	0.4	0.3	8.2	6.4
僧侶	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0
賃労働者	9.6	6.5	18.0	4.1	8.1
他の農民	42.8	30.0	34.3	55.1	36.3
商業ブルジョア	4.0	7.6	3.5	6.1	2.4
他のブルジョア	6.6	2.3	1.6	2.0	4.0
職人	12.9	25.9	9.0	2.0	10.5
その他	22.3	27.4	33.3	22.4	32.3

い、どこでもみられる不平としては、狩猟権や十分の一税についてであり、他の権利の負担は非常に軽い場合があった。

封建権利と旧来の租税が廃止されたあとで、新しい租税の体系が作られたが、たとえばサルト県当局の計算によっても、旧体制の直接税が1790年に3,506,000リーヴルであったのに、92年の新しい租税体系では5,473,000リーヴルとなり、このうち地租だけで3,796,000リーヴルとなり、地租だけでも昔の直接税を越えた。これでは貴族の特権を無くした恩恵が見られなくなり、農民には増税と感じられ、一つの不満の種になった。<sup>14</sup>

土地をもたない農民のうち、折半小作人(メチエ)は、革命によってかえって傷つけられた。旧体制のもとでは、十分の一税と貢租は先に収穫物から徴収され、その後で土地所有者と折半小作農が収穫を二分した。それだけに、主人と折半作人の間には平等の立場があった。革命はこれを破壊し、以後主人は徴収額を増加させ、分割は平等でなくなった。そこで折半小作人はこれを不正だと怒り、折半小作農の多い地方で騒動がおこった。<sup>15</sup>

14 P. Bois, *Paysans de l'Ouest*, Paris, 1960, P. 632.

15 A. Chabert, *Essai sur les mouvements des revenus et de l'activité économique en France de 1798 à 1820*, Paris, 1949, p. 17.

こうした状態が、主人の交代をともなうとき、小作農の敵意はもっと鋭いものになった。教会財産の国有化と売却により、主人が僧侶から新しい購買者にかわったとき、ほとんどの小作農が、僧侶の比較的寛大な管理からきびしい主人への変化を感じとった。小作農自身は、貧困のため自分の耕やしている土地を買いとることができない。そこにおいて、新地主对小作の対立がたかまり、折半小作農が王党派の活動家となり、新地主が革命派となった実例が多く見出される。その一例としては、シュミエ市の近くのメレーで、教会財産を買った者がシュミエの重要な織物工業家ブリオード - Briaudeau であり、彼はその地方のきわだった革命家であり、県行政官の1人でもあり、その郡の各地で土地を買った。ところで、彼の買入れた土地の折半小作農はルイ・クレモ Clémot であり、彼はこの地方の王党派の首領となった。<sup>16</sup>

サルト県でも、農民が非常に貧しく、国有財産を買うことができなかった地域で徴兵制にたいする敵意がはげしく、ヴァンデー軍にたいする攻撃を若者が拒否し、1794年の春にはフクロウ党の反乱が広がった。<sup>17</sup>

反乱者がかつとも憎悪し残酷に扱ったのは国有財産の買受人であり、フクロウ党の恨み、殺害、虐待に関する資料が多い。強制徴兵令は一つのきっかけを与えたのにすぎなく、それ以前から農民の国有財産買受人にたいする敵意が反乱の下地を作っていたのである。サルト県のフレネ郡では徴兵に困難を感じ、行政官、官吏、国有財産買受人で前衛隊を組織するといひ、93年7月ロゼ村ではヴァンデー軍にたちむかう者は国有財産買受人以外にないというので、その通りの命令がだされた。教会財産没収について、農民がとくに僧侶に同情をしたというのではなく、むしろ問題は僧侶財産が売却されてからおこったのであり、農民がのちになって国有財産買

16 C. Tilly, *op. cit.*, p. 208.

17 M. Reinhard, *Le département de la Sarthe sous le régime directorial*, St.-Brieuç, p. 11.

受人を「僧侶財産の略奪者」と攻撃したといっても、それは本心ではなかった。むしろ外来のブルジョアに土地を買いとられ、土地所有者になる希望を失なったこと、新所有者が旧所有者のほどこしていた慈善すらやめてしまったという事態に、問題が生じたのである。亡命族財産の没収売却は、王党派反乱に関係がなかった。なぜなら、これは93年6月にはじまったのであるが、このときすでに勃発していたからである。

教会財産はサルトル県で65,000ヘクタール、全県の10—11パーセントを占め、そのほとんどの売却は91年から92年にかけておこなわれた。これが87,770件であり、これにくらべて93年は1,697件、94年は1,839件にすぎず、しかも93年と94年の件数については一つあたりの売却費の面積が小さい。教会財産の主要な部分の売却は92年の末までに終り、ここで農民の幻滅、反乱への衝動が生じた。フクロウ党に同情的な七つの大きな村についての国有財産買受の状況は、つぎの表にみる<sup>18</sup>ことができる。

王党派の村落における教会財産買受の社会的分布 (比率%)

村の名	面積 (ha)	教会財産 の比率	外来者の買入	住民の買入	耕作者の買入
オベール・ル ・アモン	4.783	20	58	42	22
プレシニエ	5.785	16	67	33	10—15
ル エ	3.365	13	50	50	19—27
サン・デニ・ ドルク	4.716	28	75	25	4—18
ソレム	1.218	38	95	5	2—3
テニ	3.313	18	61	39	8—30
マロール	2.063	20	57	43	24—29

この表によると、その土地の住民は国有財産の半分以上を買い取ることができず、外来者、すなわち都市のブルジョア、付近の町の市民が多くの部分を買取った。本来の農民である耕作者ですら、わずかの部分しか買

18 P. Bois, *op. cit.*, pp. 640—649.

いとることができなかつた。このうち、ソレム村は肥沃な土地があり、富裕な女子修道院が446ヘクタールの土地をもっていた。これが農民の手に渡らず、ほとんどの部分を、遠くはなれているラフレーシュ市の1人のブルジョアが買い取った。革命政府の行政官になっていた1人のブルジョア（法律家・治安判事をかねる）がその買受の代理人をつとめた。残った部分もブルジョアが買受け、そのうちの1人はパリからきた。ここで農民の不満が高まった。プレシニエ村では教会財産の売却が一括しておこなわれた。そこに2人のブルジョアがやってきた。1人は鉄工場主で、1人はナントの住民であり、一日でこの2人が25万リーヴルの土地、村の土地の約半分以上を買取った。そののち、大村の小ブルジョアと農民が買受けをおこなったが、そのわずかの折半小作地にすらも、ナントの富裕ブルジョアが競争に加わり、農民の買受面積がわずかになった。この間、騒ぎがおこり、大事にはいたらなかったがある程度の事件がおこった。そしてこの村がフクロウ党の重要な人的資源になった。ルエ村では、最初の売却で大部分の土地がル・マン市からきたブルジョアによって買い取られ、買占のよ<sup>19</sup>うな印象を与えた。

これに反して、革命政府に忠実なサルト県の西南地方における村の国有財産買受けの状態は、つぎの表にみられる。

これらの地方は、フクロウ党討伐のための徴兵が可能であり、それだけに教会財産が少なく、外来者の手に落ちたことも少なく、その土地の在<sup>20</sup>住者が買いとった。

貴族所有地の規模と王党派反乱の関係についてみると、反乱の根拠地では貴族の所有地が12パーセントしかない。革命政府に忠実な地域では、貴族所有地の比率が33—27パーセントを占める。これは貴族の経済力が反<sup>21</sup>乱

19 *Ibid.*, pp. 650-653.

20 *Ibid.*, p. 655.

21 *Ibid.*, p. 325.

共和主義的村落における教会財産買受の社会的分布 (比率は%)

村名	面積 (ha)	教会財産の比率	外来者の買入	住民の買入	耕作者の買入
バリニエ・レヴェック	6.286	22	43	57	17—30
サン・マール・ドゥツェ	3.808	27	28—34	66—72	22—44
テロシエ	2.286	30	12	88	43—87
ヴォルネ	1.168	37	38	62	19—44
マンシニエ	3.627	4(約)	11	89	?
マイエ	4.700	7(約)	19	81	?
エヴァイエ	1.942	12	0,..	99,..	1—13
トレッソン	2.922	4	0,..	99,..	33—40

の指導的役割を演じたということにもならず、貴族の土地が多いからといって、貴族の土地を狙って農民が騒ぐことがなかったということを示す。むしろ貴族の土地が少ないだけ教会財産が多く、その教会財産が外来者の手に落ちたところから不満が生じると考えるのが妥当であろう。

ヴァンデー県においては、貴族所有の比重がかなり大きく、僧侶所有地の比重がかなり大きく、僧侶所有地、ブルジョア所有地が平均十数パーセントであり、農民所有者の数は多いが所有地の面積は小さく、少数の富農をのぞくと農民の多くは小作農かそれとも貧しい自作農であった<sup>22</sup>。買受人について、サーブル・ドロンヌ郡の職業が判明している 217 人についてみると、20人の小商人、19人の労働者、職人、18人の農民、折半小作農が小地片を買い取ったのみで買受人の多数は徴税請負人、ナントやサーブルの大商人、医者、公証人、官吏などであった。しかも 5ヘクタール以下の土地は売却件数 208のうち88件であり、多くの土地が大地片として一括売却された。それだけ農民にとって不利であった。しかも売却に際して買受人が殺到し、ブルジョアが多く郡で落札に奔走した。同じことは、ヴァン

22 M. Faucheux, *op. cit.*, p. 225.

デー県のシヨレ郡 Cholet についても言える。640人の国有財産買受人のうち、農民と職人は156人しかなく、60人が職業不明であるが、他はブルジョア、官吏、法律家、大借地農、徴税請負人など裕福な階層のものであった。<sup>23</sup>

そのうえ、地域によって租税が革命前よりも重くなった。国民議会の租税委員会は、革命前の全租税7億6,900万リーヴルにたいして、新租税5億8,700万リーヴルとなり、差引1億8,200万リーヴルの減税となるよう計画した。しかし新租税の割当に関して、支配者になったブルジョアジーは地域別の不平等を新しく作りだし、昔の不完全な課税台帳を訂正することなく利用した。そこで不動産税が最高限純収入の6分の1と定められているのに、純収入の2分の1にまでたかまったことがあり、動産程についても、純収入の18分の1を最高限と定められているのに、これがときに4分の1にまで高まった。こうしたことのために、シヨレ郡の不動産税は1791年に20万8,000リーヴルの増徴となり、動産税は44万2,000リーヴルの増徴となった。しかも当時不況にみまわれていたので、シヨレ郡では120万リーヴルの租税滞納がおこなわれていた。1793年1月5日、郡当局がヴァンデー県当局にたいしてだした要請文は、こうした人心の暗さを表現し、租税の配分が納税者の担税能力を越えるといった。しかも93年の徴税計画は、不動産税を3万6,000リーヴル増加する見通しとなっていた。反乱の日までに増税にたいする絶望と怒りが増大していった。<sup>24</sup>

## V 王党派反乱の経過

1793年2月20年、国民公会は30万人の徴兵令を布告した。徴兵の方法

<sup>23</sup> *Ibid.*, pp. 325-329.

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 269.

は、はじめにまず義勇兵を募集し、不足した数について各市町村へ割当て、多数決によって強制徴兵の手段が決定されることになっていた。あるところではくじびきをおこない、他のところでは指名によった。また金を払うことによって代理人をたて、義務を肩代りすることもできた。こうして徴兵制の中に不平等の発生する余地がのこされていた。3月4日、ヴァンデー県ショレ市が徴兵令に反対の声明をおこなった。ロワール・アンフュリール県のマシュクール市 Macheoul は、2,000人の住民を持ち穀物と小麦粉の市場として有名であり、問屋商人や富裕なブルジョアが多く、革命で富み、貧民から嫌われていた。ここに国民衛兵は100人ばかりいた。農民はこの町を攻撃しはじめた。3月11日の朝、農民は鎌、刃物、熊手で武装して侵入し、県吏員を殺し、国民衛兵を虐殺してまわった。群集のうちもっとも惨酷なのは女、子供、老人で、婦人は「殺せ、殺せ」と叫んだ。この群集を指導したのは、ラ・ロシュ・ド・サントンドレ侯という貴族であったが、13日にはシャレット騎士が80人ばかりの人数を率いてあらわれ、指導権をにぎった。<sup>25</sup>

サン・フロラン郡 St.-Florent では、3月12日に徴兵の方法を決定するための集会が開かれる予定であった。その前夜、周辺の農村で鐘が鳴り、農民が道路を走りまわり、煽動者が金をくぼって歩いた。ボンシャン侯から任命されたという5人の男が隊長と自称した。12日の朝、2,000人が帽子に白旗をつけ、小銃、熊手、棍棒で武装し、サン・フロラン市に侵入した。これにたいして、国民衛兵は200人しかいなかった。県の行政官は郡当局に徴兵の抽選を延期させようと思ひ、群集をしずめるために官吏が演説をした。そのとき銃声がおこり、1人が重傷を負った。国民衛兵が発砲し、これにたいして農民が殺到し、国王万歳、僧侶万歳と叫んだ。市役所に侵入して書類を破り、金庫のアシニアを配分した。群集は使をボン

25 G. Walter, *op. cit.*, pp. 73-78.

シャン侯の城に派遣し、ここで彼が反乱の首領になった。<sup>26</sup>

チフォージュ市 Tiffauges はブルターニュ、ポワトゥー、アンジェの各州の境界線にあり、この周辺の村の農民が3月10日森に集まり、徴兵令をのがれるための相談をした。その結果、3月12日数を増やして800人となり、チフォージュ市を攻撃、占領した。そのとき国民衛兵は40人しかいなかった。3月13日、サン・フェルジャン、ポブレオ、モンテギユが占領され、3月14日ジャレ、シュミエ、ショレ、シャランの各市が占領され、ボンシャン、デルベ、サピノー騎士 Sapinaud など貴族の指導者と、カトリノー、ストフレなど平民出身の指導者が登場した。3月22日シャロンヌ市 Chalonnes は3,500人の軍隊で守られていたが、5万人と自称する王党派軍に包囲され、降伏命令をつきつけられた。市民は降伏論にかたむき、抗戦を主張する市長は追放され、市は王党派軍にひきわたされた。このときの王党派の指導者はストフレ、デルベ、ボンシャンであった。ポルニック市 Pornic は550人の国民衛兵によって守られていたが、避難民が多くて食料が不足した。400人の国民衛兵を食料の護送にだしたところ、王党派が情報を得て市を攻撃し占領した。男性は逃亡し、老人が残っても殺された。王党派軍は略奪して酒をのみ、酔って寝こんでしまった。食料を護送していた国民衛兵が帰ってこれを攻撃し、王党派は逃げだしたが多くは国民衛兵に殺された。それを聞いたシャレットが反撃に転じ、ポルニック市は占領され、放火された。二週間で王党派軍は四つの県の半分の面積を占領し、多くの郡の中心地は彼らの手に入った。サピノー騎士はオワ Oie の城に指令部を設け、4月6日デルベと会見し、互いに独立しながらナント、アンジェ、フォントネ攻撃で協力しようと約束した。さらに、イギリス、スペインの援助を要請するため使節を派遣したが、これは途中で

26 *Ibid.*, p. 53.

逮捕されて失敗に終わった。<sup>27</sup>

このような事態が国民公会に報告されて、3月19日ヴァンデー反乱運動に加担した者は死刑にするという法令が決議された。しかしヴァンデー県の代表者が3月21日国民公会に増援軍の派遣を要請したときには、ジロンド派の支配する総防衛委員会は熱意をみせなかった。ペチヨン、バルバルー、ヴェルニヨ、ジャンソネらが討論したあげく、行政官を派遣するというだけの決定をおこなった。ヴァンデー県の代表者は、この方法だけでは不十分だと抗議してジロンド派議員と激論をおこなった。しかしジロンド派は冷淡であり、ジャンソネなどは「ヴァンデー県は完全に狂信的であり、1人の愛国者もいない」という無責任な発言をした。ヴァンデー県の代表者は、「ジャンソネ、まだヴァンデーには愛国者がいる」という抗議をおこなうほどであった。こうした態度が、断固たる処置を要求する山岳派の勢力と支持者を増大させていった。<sup>28</sup>

王党派軍はますます勢力を増大し、4月13日ラ・ロシュジャックランはオービエで共和国軍を敗走させ、4月27日ダントンが提案してパリの軍隊をヴァンデー県へ派遣することを決定させた。5月3日、王党派はプレシユイールを占領し、ここに投獄されていたレスキユール侯を救出し指導者とした。5月25日、フォントネ市が占領され、ここに占領地域を支配する王党派最高会議がおかれた。共和国軍は敗北をかさね、6月9日ソミュール、6月18日アンジェの2つの重要都市が王党派軍によって占領された。この2つの都市での敗北は国民公会に大きな衝撃をあたえた。6月24日、王党派軍はアンジェ市を去り西進して、ナント攻撃にむかった。

しかし、このあたりから王党派軍の弱点があらわれてきた。反乱にくわわった農民は郷里から遠くはなれて行軍することを好まず、東部にむかっ

27 *Ibid.*, pp. 82-86 et 111-114.

28 *Ibid.*, p. 108.

た軍隊が8,000人という数を誇っていても、ある者は軍をすてて家に帰り、減少した部分を道々で補給したため、最初から反乱にくわわった者は4分の1にしかならなかった。<sup>29</sup> そのうえ指導者は勝利を十分に利用せず、シャレットはヴァンデーの王と称されるほどの名声をもつと、戦争に関心をはらわず、貴婦人にとりまかれ、城で舞踏会、酒、恋愛に浮身をやつした。こうしたことが王党派軍の弱体をもたらし<sup>30</sup>た。

フクロウ党の反乱も同じような経過をたどった。ブルターニュのゲランド郡では、すでに92年6月から反乱の試みがあり、義勇兵の抽選に反対し、6人の若者が逮捕、処刑されていた。93年3月徴兵令を合図に暴動がおこり、農民は武装して「国王万歳」の叫び声をあげた。他の多くの郡でも、彼らは白旗をもち「貴族万歳、郡と県の官吏を殺せ、アシニアを消せ」と叫んだ。<sup>31</sup> こうした運動をジャン・コットローなどの指導者が組織した。

内陸地帯では王党派反乱は成功したが、海岸の主要都市では革命軍が強力で、サーブル・ドロンヌ市はヴァンデー軍を撃退することに成功した。ここの軍隊を指揮していたブラール Boulard はパリ銀行家の息子で、堅固さと慎重さをもって対処し砲兵隊を使って王党派を敗走させ、これを追跡した。彼は政治的には穏健派＝平原派であるといわれていたが、カンパセレスがいったように「穏健派はジャバン派よりも反乱者にたいしてやさしさをもっていたわけではなかった」。<sup>32</sup> これは当然のことであり、平原派がブルジョアジーで、王党派反乱が貴族と貧農の同盟したものである以上、貧民に同情的なジャコバン派よりも徹底的な政策をとる理由があった。

派遣委員のアンツ Hentz は書いた。「ヴァンデーに住む男達は悪い。彼らは狂信者の集まりで、時には貧民、ときには連邦主義者（ジロンド派）、

29 *Ibid.*, p. 115.

30 L. Dubreuil, *op. cit.*, t. 1, p. 193.

31 *Ibid.*, t. 1, pp. 307-312.

32 G. Walter, *op. cit.*, p. 177.

ときに貴族の集まりである」。ヴァンデー出身の議員フェイヨール Fayau は議会で演説した。「ヴァンデーではもっと焼きつくす必要がある。まずとるべき手段は、焼きはらうための軍隊を送りこむこと、必要とあれば、一年間にこの土地で1人の男も、1匹の動物も食べ物をみつけれないよう<sup>33</sup>にすること」。

このような方針が、実際にヴァンデーに送りこまれた軍隊によって実行された。反乱に参加した者は婦人、娘、子供をとわず銃剣でつきさされた。共和国軍に必要な食料を調達したあとでは、家、納屋を含め農地にあるいっさいのものが焼きはらわれた。貴族の城も同じ運命にあった。1人の兵士が30人、50人の男女を刺殺したり、頭をくだいたり、ありとあらゆる虐殺をおこなった。こうした記録が無数に残されている。そのうえ共和国軍は略奪をおこない、普通の兵士ですら5万リーヴルを手に入れたり、宝石を持ち、急に豪華な生活をはじめた者が多かった。こうしたことが貴族や農民の反感を強め、頑強な抵抗をつくり出す原因となった。派遣委員のプリュール・ド・ラ・マルヌは「この地方ではすべての住民が共和国に敵対し、13歳や14歳の少年が武器をもって我々にたちむかい、小さな子供達までが反乱者のスパイをしている。こうした小さな反逆者も裁かれ、死刑にされた<sup>34</sup>」と書いた。

王党派軍と共和国軍は互いに虐殺をくりかえしながら攻防戦をつづけ、6月29日、王党派のナント攻撃は失敗し、カトリノーは重傷を負った。7月11日、王党派最高会議はすべての国有財産の売却を破棄した。10月15日、レスキュールが重傷を負い、2日のちにジョレの戦闘でボンシャンとデルベが負傷した。そのあとラ・ロシュジャックランが総指揮官となり攻

33 L. Dubreuil, *op. cit.*, t. 1, p. 12.

34 H. Wallon, *Les représentants du peuple en mission et la justice révolutionnaire dans les départements en l'An II*, t. I, Paris, 1889, pp. 220-229 et 433.

撃をつづけた。アンジェ市を攻撃し、ル・マン上に入ったが、共和国軍の反撃に会い、12月23日サヴネの戦闘で敗北し、ここで大規模な戦争は終わった。

94年に入ると、ヴァンデー軍とフクロウ党は小規模な勢力に分散し、各地で森の中に隠れてゲリラ的な戦闘を継続した。1月のうちにデルベ、タルモン大公、ラ・ロシュジャックランが殺された。ストフレとシャレットは各地で抗戦をつづけたが、12月2日国民公会が反乱軍にたいする大赦令をだしたため、シャレットがまず講和に応じ、つづいて1795年5月2日ストフレが抵抗をやめ、ヴァンデーの「小戦争」が終わった。1795年、アルトワ伯の命令によりシャレットは反乱をおこし、上陸してくるはずの亡命貴族の軍隊と合流するはずであったが、キベロンで亡命貴族の上陸が阻止され、シャレットは敗北して隠退した。96年、ストフレがルイ18世の総代理人という資格に任命され、三度目の反乱をおこすように命令されたが、もはや計画の実行は不可能であった。しかし、これを機会にストフレとシャレットが逮捕、銃殺された。この後、1799年に一度反乱がおこり、百日天下の間にラ・ロシュジャックランの弟の率いる王党派の反乱がヴァンデーにおこされたことがあった。

## VI 王党派反乱の意味するもの

ヴァンデー反乱やフクロウ党の反乱は、貴族、僧侶の反革命暴動というよりはむしろ、フランス革命に幻滅を感じ、革命によって利益を得ることがなかった下層民の運動であった。農民の場合、参加する条件は二つに分れる。

折半小作農、または小作農は、教会財産の国有化と売却により土地を所有できるかもしれないという希望を与えられ、その直後に、ブルジョアジ

一の買受により希望を打消された。しかも、教会や僧侶よりは、ブルジョアジーのほうが土地の管理が厳格であり、それだけ、小作農にとって条件は悪くなる。しかもその土地に住む商人や工業家ならまだしも、遠くはなれた都市のブルジョアが買受けたとき、小作農との関係は冷たいものとなり、小作農の反感は強く、村の中に革命派が少ないことになる。そこで、教会、僧侶の所有地が比較的多く、それが売却されたとき外来のブルジョアがほとんどを買取った場合、不満をもった小作農の比重が強くなり、反乱の拠点となりやすい。この二つの条件がからみ合わない場合、たとえば、教会財産が在住者の手にわたる場合、あるいは、教会財産の比重が小さく、貴族、ブルジョア、大農民の土地が多い場合、彼らの下にいる小作農はそれほど激しい反乱への衝動をもたない。

自作農の場合、領主権の負担が強いところでは、その廃止によって恩恵をうける。しかし、領主権が衰退していたところでは、恩恵が少なく、かえって増税と感じられる場合があると、そこに不満がつくり出される。

王党派反乱の最大の人的資源が農民であったという事実は、フランス革命が農民を満足させなかったことを示している。貧農に土地を与えたわけではなく、すなわち土地革命が行なわれたわけではなく、また、領主権の廃止と租税改革が必ずしも農民の負担を軽減したわけでもないということが注目されるべきである。

王党派のつぎの人的資源が都市の下層民であったことは、彼らの運命が改善されなかったことの表現である。彼らは、かえって物価騰貴によって苦しみはじめていた。都市下層民の不満と貧農の不満はヴァンデー周辺では王党派的思想にむすびついたが、その経済的要求から見るならば、過激派の発生した地盤と同一である。極右と極左が、同じ人的資源の上に立<sup>1</sup>ち、同じ不満から出発しながら、両極端の思想に分化し、ブルジョアジーだけが革命の成果を独占したことにたいして抗議したのであった。そこ

で、ブルジョアジーからみるならば、過激派も王党派もともに反革命となり、共和国軍がヴァンデーの農民を残酷に鎮圧した理由があった。また、農民が頑強に抵抗したのは貴族や僧侶のためではなく、自分自身のためであった。その限り、ヴァンデー反乱はブルジョア的大土地所有に反対するために貴族主義の思想をよりどころとしたものであった。逆にいうと、フランス革命は、ブルジョア的大土地所有を増加させたということになる。フランス革命の中に理想的な農民革命を見ようとする人は、まづ、ヴァンデー反乱の人的資源が貧しい農民と都市貧民であったことを思い返す必要がある。